

基本運動をもとにしたチェックシートの作成と一考察

○品川晃彦(村山中藤保育園) 高橋保子(村山中藤保育園)

1. 研究目的

近藤は、「幼児の体力と運動遊び」(フレーベル館 1979)の著書の中で「幼児の運動的活動と体力・運動能力」の中で幼児期における基本運動(動作)は 84 種類に分類している。さらにこの 84 種の動きを身に付ける事が、「しなやかな身体を作り」「将来のスポーツ」やその他、大きく影響されると述べている。

そこで、この 84 種類の基本運動(動作)の技能が就学前までにどのように獲得されていくのか、また我々保育者は子どもたちの遊びの姿をどのように捉え、確認していくことができるのか、より具体的なチェック項目を作成し、更には作成したチェックシート項目に従って 84 種類の基本的運動の能力の獲得の度合いを確認し、そのサンプルをとることを目的とする。

2. 方法

- ・近藤の「幼児の運動的活動と体力・運動能力」の図を元に、各基本運動(動作)をより具体的な遊びや運動に置き換えチェック項目を作成する。
- ・調査方法は、園庭で遊んでいる子どもの姿、保育活動として取り入れられる各年齢ごとの運動遊びや園外保育での様子からチェックを行った。なお保育日誌や個人記録も補助的資料として参考にした。
- ・調査対象は、東京郊外のM保育園の 4 歳児～就学前の子どもの中から、幼児の運動能力テスト研究会による「2003 年度幼児の運動能力テスト」で園内の成績上中下位 2 名ずつ、計 12 名を対象に調査した。

3. 結果

チェックシートを作成するにあたり、まず 84 種類の運動の方法をより具体的にし、それにあった基準や遊びの内容を検討した。その中で感じたことは達成度を図る基準を段階的にどのように設けることが望ましいのか、その判断に苦慮した。

なお、担任以外の保育者がチェックシートを見ても、すぐに理解しやすいように、より具体的で、かつチェックしやすいように項目を細分化するなど、実践の場に適用しやすいよう配慮した。

次に、実際に作成したチェックシートを元に調査したメリット・デメリット、更には、研究者以外の保育者に実際にシートを使ってもらい、検討した。

＜チェックシートを用いてのメリット＞

1. 獲得している運動遊びのタイプがひと目で理解できる。また、獲得できていない運動遊びが分かり、担任間での把握と保育に取り入れやすいところ
2. 4 歳児～就学前まで継続して、その子の運動発達を見ていけること
3. 指導計画のねらいを立てるに際して、その運動遊びの中でどのような動き・遊びが欠けているのかを一見して確認できるところ

＜チェックシートを用いてのデメリット＞

1. 使用する保育者によって「出来た」という基準に差が生じるところ
2. チェック項目によっては、まだまだ内容がわかりづらく判断に迷うところ

＜研究者以外の保育者が使ってみての感想・評価＞

～プラスの評価～

「運動面の把握がこれまで以上に出来やすい」
「このチェックシートを見ながらカリキュラムを組み立てていける」 他

～マイナスの評価～

「項目の内容によっては、ずっと達成できない部分があり、その事ばかりに意識が向いてしまう事になる」
「チェックシートばかりに頼ってしまい、その枠内だけの保育になってしまう恐れを抱く」
「もっと項目を具体的にしたり、他の遊びも入れていけるはず…」 他

4. 考察

実際に、チェックを行っていく中で判断に迷う項目やまだまだより具体的な内容に置き換えなければいけない項目など改善点は多々あった。

例えば、「走る」という運動遊びのタイプにある、「ジグザグに走る」というチェック項目は、「カラーコーン」を使って走る事に限定せず、遊びの一例として考え、それぞれの保育者が項目の意図するところを理解した上で、柔軟に保育の中で判断していくことが求められるであろう。

運動能力チェックシート

名前 _____ 生年月日: ____ 年 ____ 月 ____ 日
 4歳児: 好きな遊び _____ 5歳児: 好きな遊び _____

運動あそびのタイプ	運動のしかた	チェック項目
歩く	立って歩く	まっすぐ歩く
	四つ這いで歩く	四つ這いで歩く
	走る	巧技台のはしごを渡る 60cm 70cm 80cm 90cm 10cm 20cm 30cm 40cm
走る	まっすぐ走る	かけっこ: 走り方 急坂を駆け上がる
	ジグザグに走る	まっすぐ走る: 腕を揺って走る: 力強く走る 急坂を駆け下りる
	追う、逃げる	おっちゃんを並べジグザグに走る 逃げ取り 追いかけて
跳ぶ	高く跳ぶ 遠くへ跳ぶ	巧技台の棒とび 10cm 20cm 30cm 20cm 30cm 35cm 40cm
	跳び続ける	なわとび (二人縄跳び5回以上) 大縄 ケンケン跳び (m)
	方向を変えながら跳ぶ	ケンケンバー フープ跳び 巧技台の棒とび (サイドジャンプ)
まわる	つかまってまわる	鉄棒 逆上がり 空中逆上がり
よじ登る	手だけ	登り棒 ビーム登り ハードル
	手と足で	ジャングルジム はしご 壁板 ネット
おろ下がる	手だけ	うんてい 鉄棒 (おろ下がる)
	足だけ	たいこばし 鉄棒 (うもり)
	手と足だけ	鉄棒 (横つたわり) はしご (鉄棒ぶたのまるやき)
押す 引く	急に押す、引く	すもう 綱引き
	押し (引き) 続ける	押しくらべ 引っぱりっこ タイヤ引き
ささえる	手だけ	鉄棒 (おなかをつけて) ビームのサイドジャンプ
	手と足だけ	ロープウェイ すべり台
くぐる	動きながら	トンネルくぐり ジャングルジム
	その場で	輪くぐり はしごくぐり 巧技台の棒くぐり
転がる	前後にころがる	マット (前まわり) マット (側転)
	前にころがる	横転
バランスをとる	動く場所	おらんこ コンパン 忍者渡り
	不安定な姿勢で	平均台 はしご渡り 横木渡り
身をかわす	前後左右に	鬼遊び ドッチボール (かわす・よける)
	上下に	
投げる	遠くへ	フープ投げし ボール投げ (下投げ・上投げ) フリスビー
	的に当てる	ボール投げ (的当て) 玉入れ ボウリング
蹴る	遠くへ	サッカー
	的に当てる	力強く蹴る まっすぐ相手に向かって蹴る
つく		まりつき (ドリブル) 5回 10回 20回 走りながらつく
取る		転がってきたボールを取る ワンバウンドで取る フライを取る
まわす		なわとび (5回以上) 前回り跳び 後ろ回り跳び 駆け足跳び あやとび 交差とび
こぐ	乗り物を乗りこなす	三輪車 スケーター 二輪車
力'に合わせる		ギャロップ スキップ ホップ ツーステップ
水中の動き		浮く しずむ (潜る) 泳ぐ

を育む事はできないであろう。その意味で、保育者は結果よりもその過程を重視し、子どもの気持ちに寄り添いながら共感していくことが大切なのであろう。

5.ま と め

実際にこのチェックシートを作成し、今回の事を踏まえ、来年度は、4歳児～就学前までの対象年齢をもっと下げ、チェック項目の改正、具体化をしていけば、基本運動(動作)の獲得する時期についてもっと具体的に把握でき、その子にとって欠けている運動面(獲得できていない動作)がその時期、その時期で確認できるのでは…と考え改良していこうと思う。

例えば、0歳児の移動運動、寝返り、顔上げ、這う、つかまり立ちなどまで掘り下げて見ていけば、乳幼児期の、子ども一人一人の運動発達を継続してとらえ、一見して把握できるのでは…と考える。

最後に、今回の調査を行っていくうちに、項目ばかりに意識が向きがちになり、それを頼りにする危険性を私自身が強く感じたのは事実である。

考察でも述べたように、このチェックシートはあくまでも補助的な

ものであり、重要な事は、保育者が、いかに子ども一人一人の発達を把握しながら、指導計画を考え、それぞれの発達に合った運動遊びの環境を指導計画の中で考え実践していく事なのであろう。

最後に、この研究は運動発達をチェックしていけばその子の運動に関する発達段階を一見して理解できるのではないかと思行ったものである。しかし、そのチェック項目の中には、保育環境の設定や保育者の関わり方一つで結果を左右するであろうと思われるものや、その他にも多くの課題を明らかにすることができた。今後の検討課題としたい。

参考文献

近藤充夫 「幼児の体力と運動遊び」(フレーブル館 1979)

次に、このチェック項目を利用する際には、留意しなければならない点として、保育者がチェックすることばかりに意識が向いてしまい保育本来の目的から遊離してしまい単にチェック項目を課題としてこなすことに意識が向けられるならば、子どもの意欲は無視され当然、能力も十分に発揮されないであろう。

つまり通常の保育の中で子どもたちが主体的かつ意欲的に取り組めるような遊び環境を保育者が意図的に設定し、その中で運動発達をチェックすることが本来の利用方法であって、短絡的にチェック(確認)をするために試験的に課題をこなすような保育であってはならないということである。

また、「できた」「できない」という結果ばかりを求めると、子どもの心に優劣感だけを抱かせる事になり、挑戦する意欲であったり、頑張ろうとする気持ち